

第 43 回目 新しい人を身に着る (15)

親子関係の教え(1) —人格の誕生と尊厳—

はじめに

●前回は、結婚の奥義について「人はその父と母を離れ、妻と結ばれ、ふたりは一心同体となる」というその夫婦の愛の連帯性とその奥義—キリストと教会の関係を表す使命—について考えました。今回と次回の二回にわたって、親子関係について取り扱いたいと思います。特に、今回の第一回目は、子どもの人格の誕生と尊厳について考えてみたいと思います。まずは、テキストとなる聖書箇所を提示します。

【新改訳改訂第3版】エペソ人への手紙 6章 1~4節

- 1 **子どもたちよ**。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことだからです。
- 2 「あなたの父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。すなわち、
- 3 「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする」という約束です。
- 4 **父たちよ**。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえて、主の教育と訓戒によって育てなさい。

●今回は、このみことばを理解する前提となる事柄について扱います。コンテキスト(文脈の前後関係)をまず、見ておきたいと思います。コンテキストは、5章 21節 「キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。」というみことばを土台としつつも、夫婦関係、親子関係、主人と奴隷の関係において、キリストにある新しい関係の中でそれぞれが「互いに従う」ことが勧められています。しかし「互いに従う」という表現だけを見るなら、それは矛盾した表現です。「妻は夫に従いなさい、子は両親に従いなさい、奴隷は主人に従いなさい。」に対して、「夫は妻を愛し、両親は子を育て、主人は奴隷に仕える。」とあるにもかかわらず、「互いに従いなさい」とあるのはどういうことなのでしょう。

新共同訳は「キリストに対する畏れをもって、互いに、仕え合いなさい。」

柳生訳は「キリストを畏れ敬う気持ちから、互いに、ゆずり合いなさい。」

尾山訳は「キリストに対する恐れをもって、互いに、相手を立てなさい。」

と訳しています。これらが意味するものはどういうことでしょうか。それは、それぞれ(夫婦、親子、主従)の関係における、**相手に対する「人格の尊厳」**です。つまり、「互いに従う」という表現が意味する新しい関係(互いに仕え合い、ゆずり合い、相手を立て合う関係)とは、キリストを畏れ敬うという視点から、相手に対する人格的尊厳をもってかかわる態度を意味します。

●今回は、このようなコンテキストの流れの中にある親子の教えとして、テキスト 6章 1~4節の親子の関係が教えるところを受けとめたいと思います。

## 1. 名づけることによる人格の誕生

●詩篇 127 篇に、「見よ。子どもたちは主の賜物、胎の実は報酬である。」とあります。(この節は同義的パラレルリズムになっていて、「子ども」は「胎の実」と言い換えられ、「主の賜物」が「報酬」と言い換えられています。つまり前半と後半は、同じ意味として理解してよいということです。その意味するところは、子どもは決して偶然の産物ではなく、神からの贈り物であると同時に、両親のもとにゆだねられた神からの預かりものだという事です。「贈り物」と訳されたヘブル語は「ナハラー」(נְחֻלָּה)で、新共同訳は「嗣業」と訳しています。

「報酬、報い」と訳されたヘブル語は「サーハール」(שָׂכָר)で、主への信仰によって与えられる「報酬」という意味です。おそらく、子どもたちは信仰によって結ばれた夫婦に与えられた神からの「相続」、かつ「報酬」ですが、決して親の所有ではなく、神からゆだねられたあずかりものとして育てるという使命が与えられたという意味で理解すべきです。

●あらゆるいのちは神から出て、そして神に属しています。「贈り物」といっても、本とか宝石といったものと同レベルのものではありません。神のもとにある生きたいのちある贈り物(プレゼント)です。このことを、私たちがこれから親子関係を考える場合に、大前提としなくてはならない大切なポイントなのです。

●ところで、子どもは、大人のことばを話したり、理解したりするよりもずっと以前から、自分の名前がやさしく言われるのをたくさん聞いて育ちます。ですから、自分の名前が間違っているとすぐさま反応します。「あんなじゃなく、なお!!」。この反応の速さに私は驚かされます。子どもは自分の名前と自分の存在とが一体となっているのです。このように、子どもが自分を一個の人格として、ユニークな存在として気づくようになるのは、自分の名前を通してなのです。

●自分の名前に反応して答えるのはその子だけです。それは自分の親から呼びかけられることから始まって、他の人からも名前を呼ばれるようになります。そのようにして、子どもは自分という独自の存在に目覚めていきます。子どもが学校に行くようになると名字(姓)で呼ばれるようになりますが、それまでは名字ではなく名前で呼ばれます。神田家で、神田礼とは呼ばれません。礼とか、恵とか、安とか、尚とか、真周とか、奏偉です。幼かった頃の礼は、「礼くん」というのが自分の名前だと思っていたようですが・・・。

●いずれにしても、子どもは自分の名前に対して独占的な感情をもっているようです。そのうちあだ名でもつけられるようになるかもしれませんが。第二子の恵は「けいとん」と呼ばれています。母親がつけたのですが、あだ名もある意味で独占的存在を意味します。他の者よりも何かより目立った特徴をもっていたり、あるいは、学校に行くようになって、仲間からより好ましい存在として受け入れられたりしている場合、自然発生的にあだ名がつけられます。私も、昔、友達同士で、互いにあだ名で呼ぼうとあだ名をつけこしたことがありますが、すぐに使われなくなりました。なぜでしょう。わざとつけたものだったからです。あだ名は意図的ではなく、自然発生的に生まれるようです。そして、良い意味でも悪い意味でも、そのあだ名に対して反応するのはただ一人だけです。これが人格的存在を裏付ける名前の持つ意味です。

●新約聖書も四つの福音書があります。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネとそれぞれの立場からイエシュアの生涯を描いています。マタイ、マルコ、ルカは共観福音書といって、イエシュアの生涯をある程度順を追って記していますが、それでもマタイはマルコとは違うし、ルカとも違います。同じ出来事を記す場合でも、それぞれ独自の見方をしています。ヨハネに至っては、福音書と呼ばれますが、共観福音書とはまったく視点が異なります。つまり同じ福音書と呼ばれるものでも、その前に、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネとつくだけで、全く独自のものとなるのです。聖書 66 巻それぞれが、かけがえのなさをもっています。つまり、それぞれの著者による個性や主張に多様性があります。マタイはマルコとは違うという自己主張をしているのです。とはいえ、矛盾があったり、対立的な思想をもっていたりしますが、不思議なことに聖書は全体として統一性をもっているのです。それはそれをまとめた神が聖書の著者だからです。多様性の中にも一致があるのです。

●それと同様に、一つの家で名字が同じでも、子どもたちの名前がそれぞれ異なるということは、その一人ひとりの存在がかけがえのない存在であり、ユニークな個性をもった存在であるということが受け入れられなければなりません。そこに人間の尊厳性があるからです。

## 2. 子どもの人格の尊厳とは

●そのような視点から、私たちはこれから親と子の関係を見ていかなければなりません。親が自分の子どもに対して名をつけるという権威は神から与えられたものです。その名前は、子どもに人間としての尊厳を授けることを意味します。神が自分の形に似せて人を創造されたとき、その「人」には名前がありませんでした。単に「人」という存在でしかありませんでした。しかしその「人」から眠っているときに、人の助け手としての女を造り上げたとき、神は彼らを祝福して、人を「アダム」と名づけられました(創世記 5 章 3 節)。しかし、妻となった女を「エバ」と名づけたのは神ではなくアダムでした。そしてアダムは自分の子どもにそれぞれカイン、アベル、セツと名づけました。神が名前をつけたのは、アダムだけです。そしてこのアダムがすべての生き物に名前をつけ、自分とかかわる者に名前をつけたということは、神の創造の働きを共にすることであり、同時に、名づけた妻や子どもに対して、人間としての尊厳を与えたのです。このように名をつけるという行為は、子に対して人間としての尊厳を授けることなのです。

●クリスチャン・ホームではなぜか子どもの名前が聖書的です。神田満先生の子どもの名前は、礼、恵、安、尚。大滝さんの子どもの名前はマタイの英語読みで真周。かつて教会にいられていた三熊さんの子どもたちの名前は、長男の堅信という名前に続いて、志門、賛美、まりあ、愛、創(のあ)・・・すべて聖書と関係する名前です。そしてそれぞれの名前には両親からのなんらかのメッセージが込められているはずですが、そうしたメッセージが子どもに伝達されて行くかどうかは、両親と子とのかかわりいかんによります。親も、自分が名づけた子に対して大きな責任があります。最近の子どもの名前は音の響きがいいからという理由でつけられていることが多いようですが、メッセージ性がないのは名前としていかがなものかと思わされます。

●名をつけることで、名づけた子の存在に対するある種の責任が課せられています。それは、子どもを神からゆだねられたものとして育てるという責任です。そこに「人格の尊厳」があります。子の「人格の尊厳」とはどう

という意味でしょう。私は次のように定義したいと思います。

**「親から名を与えられた子が、決して親の所有物とされることなく、また、親の夢を実現する道具とされることもなく、あくまでも、神からゆだねられた存在として認められ、やがて子が自らの意思で、人として自立していく権利が尊重されるということです。」**

●親が自分の子どもを自分の所有物のように扱うのか、それとも人間として尊重するのか、自分が子どもとどう向き合うべきか、それは自分の子どもが生まれて、子どもに名をつけるその時から、両親が直面しなければならない問題なのです。しっかりと心の準備をしていなければ、どう育ててよいのかわからなくなるはずで

●「親の責任は、まず、子が自分とは異なる人格を持つ存在であることを理解することです。たとえば、子どもが自分の意思を表すことに対して慎重に受けとめること、単に、反抗しているとか、わがままだと断定して断固として子どもをねじ伏せないこと。」です。3~4 歳頃に見られる反抗期は、やがて思春期に訪れる本格的な反抗期の予徴です。その頃に見られる反抗期の段階で、子どもが自己主張できる唯一の方法は、「いや!」ということばです。「・・しなさい」「いや!」「こうしなさい。」「いやだ!」・・

●子どもは、ある意味で、親の許容の限界がどこまでか、どこまで許されるかというその限界の範囲を試しているところがあります。ですから、親の誤ったプライドによって、なにがなんでも子を自分に屈服させようとして、やみくもに命令したり、脅したりしてはならないのです。ましてや親の気まぐれで、無理やり降伏させたりするのはよくないのです。

●親は子どもの反抗期を迎える前に、あるいは、迎えた時に、親が自分に与えられている權威の適切な限界を知るべきです。実はここが難しいところだと思います。親としての面子を立てるための權威ではありません。子どもを自分の望み通りあやつろうとすることは、子どもの人格を尊重してはいません。子どもが自分とは異なる一つの人格を持つ存在なのだという人格の尊厳というものを、親は心のどこかにいつも持っていなければならないということです。この視点が欠けると、權威と力による誤った威圧が起こります。確かに、子どもをある意味でしつけなければなりません。親が自分は絶対に間違っていないという確信がより強いと、与えられた權威の適切な限界を越えてしまいます。

●このことは、なにも親子関係だけの問題だけでなく、社会において、權威を与えられた者とその權威のもとにある者との関係の問題でもあります。いわゆる「パウハラ」(パワー・ハラズメント)です。親は子どもに対して權威を与えられています。子どもはその權威に従うことが大切ですが、權威が誤って用いられると、子どもはやがて權威を正しくない方向で、間違った方向で用いることになるかもしれません。

●社会の中では權威を与える場についていなくても、親であればだれでも、家庭では子に対して權威を与えられているのです。その權威をどのように用いるべきか、問われているのです。自分に与えられている權威をどのように用いるか、またその限界はどこまでかを上に立つ者は子どもを通して学び、それを心得ておくことが必要なのです。

## אגרת שאול אל האפסים

●親子というやり直しのきかない、生涯で一回きりのかかわりをどのように生きるか、それは子どもが生まれて名をつけた時から始まるのです。「子どもが与えられました。」との報告に、「おめでとうございます」と答えるより、「ご苦労様です」という方が正しいのかもしれませんが。自分が親になるという大きな責任を担う、やりなおしのきかないかかわりの冒険が余儀なくされるからです。

●ところで、子どもの親に対する反抗期をどのように受け止めたらよいのでしょうか。私をこう考えます。それは、両親に依存しなければ生きていけない子どもが、—

①やがて子どもが親から離れて自立していく大切な成長のプログラムとして

②親が子を自分の所有物のように考えることがないようにするためのプログラムとして、

つまり、親に与えられている権威の限界を知らしめるために、神が定めたプログラムかもしれないということです。反抗期を通らない子どもは、そのときは育てやすい子供として受け止められる傾向がありますが、そこに大きな落とし穴が潜んでいるのです。

●今回のメッセージの準備として、「夢砕き」—子育て失敗者の祈りと賛美—という本をさらっとですが目を通しました。その内容は、ある家の長男による長い家庭内暴力が続く中で、万策尽きて母親がキリストと出会いクリスチャンとなりました。父親も求道するようになります。この問題のために、教会の牧師が解決のために、あらゆる限りの努力を傾けたようです。そのためか長男の暴力的な症状は治まったかに見えました。ところが、正常に戻った長男がありのままの自分の現実と直面したことにより、自分の夢がごとごとく崩れ去り、未来に対する希望を喪失して、27歳にして自殺するという結末を迎えてしまったのです。

●本書は、母親が残された長男の生育日誌を丹念に読み返しながらか、自分の育て方が間違っていたことを悔い改めた涙の書です。ふつうならば隠しておきたい「子育て失敗の記録」がどうしてこの世に出版されたかというならば、母親であった舟山紀(のり)さんという方の信仰が、この出来事を通して、神への祈りと賛美へと昇華していったからです。本書に記されているケースは特別なものではなく、家庭内暴力が起こる典型的な例のようです。裕福な家庭で、父親不在のゆえに起こる母子癒着関係にあった長男が、三歳児の反抗期を通ることもなく、完全さを求める母親の強迫的な性格に同一化して「良い子」となって育っていく。一人遊びをして、幼稚園の集団生活になじめず、早く入りすぎた大人との対話や完全癖から第一声が発しにくい吃り(どもり)になってしまう。名門の小中高校を経ながら、一流大学受験失敗を契機に、一気に母親への言葉による暴力から、父親への暴力へと発展していき、家庭崩壊の極限状況へと至っていく。・・・このようなことを見ていくと、・・・**子どもの反抗期というプロセスは、神が子に対して与えている「人格の尊厳」が、親によって脅かされないようにとの神からの警鐘のように思えてきます。**

◆次回は、子が両親に従い、親は子どもをおこらせることなく、主の教えと訓戒によって育てるとは具体的にどうということかを、学びたいと思います。